

由利本荘市教育委員会

文化財の部門	有形文化財	文化財の種別	工芸
文化財の名称	こんいとおどしすじかぶと 紺糸威筋兜		
品質・員数	鉢部鉄錆地 鞆は鉄板製 一頭		
法 量	鉢高 12.0 cm、鉢前後径 22.0 cm、鉢左右径 19.8 cm 展示寸法 一幅 39.8 cm、奥行 46.5 cm、高さ 53.5 cm		
概 要	<p>兜は戦時において打撃・斬撃や飛来・落下物などから頭部を守るための防具で、本来は鎧や具足とともに使用された。この兜は五代亀田藩主岩城隆韶が着用したと伝えられ、後に岩城家が代々崇敬する天鷲神社に奉納されたものである。五代藩主隆韶は幼少時仙台藩で養育されていたが、若くして亀田藩主となり、家臣団を再編し家中の融和を図るなど、藩主権力の安定化を目指した人物である。</p> <p>この兜の鉢は筋兜鉢で、天部に四枚重の八幡座、鉢の前面に3枚、背面に2枚の篠垂を施すなど、全体的に細工が細かく精密に作られている。また、吹返には、「連子に月」の岩城氏家紋が施され、眉庇や吹返、喉を保護する頬当の蝙蝠付部分に、絵章を使用するなど、伝統的な型式を踏まえている。なお、鞆は三段重の笠鞆である。</p> <p>蝶の形をした前立は、『亀田郷土史』によれば、岩城家の祖先とされる平国香の息子貞盛が平将門の乱の際、味方に擬えた白蝶の群れが、敵に擬えた黒蝶の群れを駆逐したのに勇気づけられ、乱を平定した故事に因んでいるといわれている。</p> <p>兜の制作年代については、文書資料などが残っておらず詳細は不明だが、鞆に戦国時代以降流行した板札を使用している点などを考えると、江戸時代と推定される。江戸時代中期から後期にかけては中世復古調の兜が流行し、この兜は亀田藩主隆韶(1708～1745)着用 of 兜と伝えられることから、17世紀から18世紀前半に中世の兜を模した意匠で制作されたと推定される。なお、鉢については中世後期から近世初期のものを再利用した可能性が高い。</p> <p>本資料は、亀田藩主着用の資料であるとともに、細工の精密さや技法などから、本市を代表する兜であると考えられる。</p>		
指 定 年 月 日	令和6年4月30日		
所 在 地	由利本荘市岩城亀田亀田町 41 (由利本荘市岩城歴史民俗資料館)		
所 有 者	天鷲神社(由利本荘市岩城亀田亀田町字亀田町10番地)		
管 理 者	由利本荘市教育委員会(由利本荘市西目町沼田字弁天前 40-61)		

紺糸威筋兜（正面）



（側面）



鉢部および八幡座



絵韋部分拡大

